

錦の里五編上



3012  
13







山  
素  
花  
山  
花  
山  
花



三浦 清

公子風流嫌錦繡

新裁白紵

作春衣

金鞭留當誰家酒

拂柳衝花

信馬歸



フチカワラバシロヒ

遊仙奇遇錦の里卷之十三

江戸 為永春水著

第廿五回

あはれ清経と終夜語り明して曉のち産屋敷に  
あき深井の里の孤家公のふ起すくお飯のまを  
勝る元別深ね住居のりまれば一更くみ園まう街  
湯屋をさうらえて花は且ねお起は成生せんり也指の  
支度が出来まうこヨ今おのり病気が悪くは在也生





中て美つりませうトいふ折入養戸の植木を世通う  
枝をくまらる者あり庭の方より極側の隣より女  
何卒内免を成ま〜お近でございのまはト言入られハ  
清雅ハ受け清「シテナお近まんがアけり人おような昭夜  
くうはごにお文が、お世は〜めりいらい子ト入りお花、内より  
隣子と明て花子けり人お遠入は成ま〜トお〜おせ赤  
らめていらいハお清雅をうり居る所へ女が来て居るよ

思ひ居るごらんといふ公妃とあまきど〜お近にお文が所目  
の文方は家へ帰して居る〜と思ひ清雅の病を見  
審お文へ袴をいふ〜お文も婢女も見え  
た〜ふ豊花と見え〜女のおまればわ〜いまがら  
極側よりようて清雅へ挨拶〜お花へも金沢とればハ  
清〜よ〜今日お文お出でけりお文ハま〜途津極側も  
きて居るのよ〜五早昭夜お帰るは成てま〜お花の





方へも今朝お出成このでござるまはうとられて  
清雅ハ作天一 清五三お文ハ昨夜お茶の宅へ上宿  
のぞくひ久 一 何様か〜 夫で昭目松の  
方へお出成て 清一これぎうまご帰らぬのぞく五  
トお近も物トッキリ早候と信切りのお花も実々  
きのあまふ三人顔を見合ひが 三ア何様〜  
在座のまはう 五三お文さんハお年が行きぬでも女中

胸へお出さう 穢る小途中でござる遠くめいふも  
のぞくまはう 清一お〜もお捨てるまはう  
お花〜 眞らト途方ふくれる 清持の心配  
お近もお花も 俱々お物を押して 湯身とせう外  
折るもあ〜 せんハせん 辨の所へ庵の戸と  
つまらう 一 奈ト頼〜 米町の湯治の清雅  
せん〜 お花の心配



あぶら返りのあも乃びまはまひイ左様さぶト出で  
中 後中 清雅にお近お花ふを念おようはト一女の施を  
今一とさき 彼お武家小別宗さく在ゆと結  
○看官既小四編とよとてお文が途中の災見ふ  
出合まも其節直身 娘君のお供のえお扱ひれて  
箱を除れおし金交の中ふ入へる由存知さるべ  
其由敷めてお文お目おんへおしおんおのた  
二六六

お使はぬん〜 大徳宗一と漢〜ぬん  
あふあのみをさるぬふあさで山殿のま〜ぬ

廿六回とよとてあ〜

あ〜とさき せん〜とていぞ 女中さ〜おしおん〜ぬぬの  
お嬢がけ方へお帰るをさ〜と若旦那がお伴と第お世  
胸がドも〜と〜と〜とヨ 花へ  
ま〜とさき ね〜と〜と因那がお伴さ〜け節 妹さ〜と

居るが今夜は近きの方へ止宿せよと  
おれは左様ござらう。さうして居るし  
おれは成てお文さんへはけ方へお帰  
お痛れも清くさう。寤るにぞんじ  
おれは成てお文さんへはけ方へお帰  
お痛れも清くさう。寤るにぞんじ  
おれは成てお文さんへはけ方へお帰  
お痛れも清くさう。寤るにぞんじ

おれは成てお文さんへはけ方へお帰  
お痛れも清くさう。寤るにぞんじ  
おれは成てお文さんへはけ方へお帰  
お痛れも清くさう。寤るにぞんじ  
おれは成てお文さんへはけ方へお帰  
お痛れも清くさう。寤るにぞんじ  
おれは成てお文さんへはけ方へお帰  
お痛れも清くさう。寤るにぞんじ



女中も左様言つて置かぬが 秘が全帳まると店の方へ  
ゆく形を才とほし取れやとやういひけりまはるるいひとて  
美濃の野原がふふうまひう 松ふふよつて身を  
他へ逃かしとてお文と政と助と家督ふはまけられたる  
まひ手それまゝのあやま お前へひかへるとおの世は  
あやまのせと頼むるおの世のふと頼むてもまた世は  
お文様へはげける

第廿六回

物怪の幸ひと異なると災があると思へ却て文が  
吉のとある 剛ち物の怪が身の幸ひとありとて  
変ぞうーまてもお文の近の家より放火帰る途中  
腕を危き災糸の陰をくま折らふ故にせよ  
君の奈何なる世の因縁が在ませーまゝん 四敷の  
出入在るお文の身の上をいふものうま便のことあり

そのまゝを尋ね置て世話して一々いさべ一珠の奈明  
ら一女子あれ何ぞ世話をし一々て居るらん姿も  
賤うざれバ目通りたてても苦一うまうと作られ  
折ふ中老梅が谷とら一羨一き女中が室初よりお文と  
らうて冠着ても救せらうがお文の身の上を六く一あて  
あつけるゆゑよき細さやとおひを女中の山姥奥長向の  
ま中へわら口へはるても苦一うまうと女中の好美

それより御殿へ召出され一折さまうふ町家とらどもなを  
人を多くつひの精進を道場の主殿の師匠にまじらせられ  
て我々もお武家の奥へよりお心を同くはる家の奥の  
おへや  
山姥をみまうて還高しつるまもあり一ゆゑあうく一ゆ場を  
せげ赤梅が谷へ我部を小体はまを信切の世話をまされ  
他の女中の身理も兼略するまうと春一これとらう  
けるゆゑお文の安堵一々一き別條の山姥へよりし能て







折へぬる次の女中がお次へ申すと  
 梅が合きぬアおが  
 まのトの交交園で梅が合くお次の男も立知れば  
 お鏡にアアお文さんとうをとお次ひごとちては夫栗女中が  
 まの 梅 左様入只今お同ふくらふううお使者の男の扱入  
 ても通して待せやが宜トのひまう又お茶を目ればお茶を  
 お腰えとお文を連られぬ庭へおまをてぬる梅が合はるる連の  
 者お茶をううぬ上お中お文お文お若んとして使の女の扱を

と 受入うけいれおなる次の女中おんなぢゆうへ宛あてひきまう  
 鏡かがみてやてへる筋すぢでいひのめがうらまへに女中おんなぢゆうへ宛あてひきまう  
 半はん獲とくおひき直なおぞいひのめがうらまへに女中おんなぢゆうへ宛あてひきまう  
 衣裳いさうをお貸かひまういひのめがうらまへに女中おんなぢゆうへ宛あてひきまう  
 懐なごづらむしはまらまらひつこぞとていひまう 梅うめ左ひだり格かた入いれそとて衣裳いさう  
 へいひまらむと居ゐる人ひとへいひまらむしはまらまらひつこぞとていひまう 梅うめ左ひだり格かた入いれそとて衣裳いさう  
 俗ぞく入いれ町の奥おく女の風かぜをまひまらむしはまらまらひつこぞとていひまう 梅うめ左ひだり格かた入いれそとて衣裳いさう

三十三

おひき 梅うめが谷やのむしはまらまらひつこぞとていひまう 梅うめ左ひだり格かた入いれそとて衣裳いさう  
 のち 後のち獲とくて衣裳いさうをいひまらむしはまらまらひつこぞとていひまう 梅うめ左ひだり格かた入いれそとて衣裳いさう  
 是こゝ則すなはち清きよ雅みやび簪かんざし次つぎ希まれ人ひとに書かきて身みを張はくといひ  
 是こゝ則すなはち清きよ雅みやび簪かんざし次つぎ希まれ人ひとに書かきて身みを張はくといひ  
 卷まき行ゆきのお梅うめがうらまへに二階にがい堂どう宿しゆく小こ中ちゆう者しやら  
 人の実みひまらむしはまらまらひつこぞとていひまう 梅うめ左ひだり格かた入いれそとて衣裳いさう

當家へは出張者の口意へけのころの同い  
 お中巻とまで遊ばせぬと申すも今梅が谷がなほ  
 おいらしむるへい舞へくは傳へる豊花が清雅の伎と  
 ろし文のむらふもへと持寄るとはさるるま  
 梅がさへ彼お花は對面よりけり同くお花も我れは  
 何らのさへ梅へいお花はけり申すのへさる  
 ぬまのよりあしおいらしむる梅は換投さればお梅がさへ

二ノキ三ノ十五

万一それゆに在りさるるくおいらしむる梅は換投へお文が  
 上の山影ゆな災籠を退れ一由良の山礼とやと連て  
 帰る度候を預り梅がさるるけしやよとるおいらしむ  
 由良も守ねとぬね姫君ゆえ危角ふお文ととる  
 たまらぬ別れあるまお文の更と宿人やまへ一安あも  
 ぬまらぬまのゆれは今西二日けり入道は度と候は  
 お文も兄の病をが公と申すよと國で由良ふ候は存候

ことわげける娘の若後うまへはしやめあはれよ  
 おふけの清雅へそ後と別ふは度とが下達ひめ  
 よう〜お花までお文の姉も同様の女子とあれば若  
 うち傳ふとてはきや付よめてそ目のお花も  
 文のきく深井のこまごま〜〜〜安堵を同く  
 山原ふらう〜〜〜の略せ〜山下館のめあま〜  
 ことわげける娘の山原ふらう〜山原の種く

賑やう〜申お花へ〜隔〜小庭のありける  
 敷き体足〜居る所〜あび〜申老梅〜  
 花さん〜同ふ〜あ〜ト〜燈火お花〜居る  
 東〜花〜免〜お断〜上〜体足と  
 梅〜ア〜サ〜梅〜お言〜松〜  
 ま〜ヨ〜ア〜ウ〜定〜め〜清〜雅〜さん〜の〜あ〜ま〜〜お〜園〜で  
 山原ふらう〜が〜私〜が〜お〜花〜の〜身〜〜似〜〜の〜が〜僥〜倖〜ふ〜ら〜う〜









